



Title	絵本のメタファー
Author(s)	今井, 恋
Citation	ハンガリー研究. 2021, 1, p. 261-275
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81537
rights	
Note	ISSN: 2436-1364 (print), 2436-4932 (online)

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

絵本のメタファー

今井恋

1. はじめに

言語習得期に子どもが絵本から学ぶのは、文法や語彙だけでなく、加えて世界観である（岡本 1990:93）。子どもの言語習得における絵本の重要な役割は、抽象概念を子どもたちに教えることだといえることができる。また、異なる文化や社会で育つ子どもたちが学ぶ世界観には、当然違いがみられると考えられる。一般的に、絵本の作者は読者として子どもを想定しているため、子どもたちはおそらくそれぞれの文化・社会で生きる作者の影響をも受けるであろう。絵本を通して子どもたちは新しい世界の経験を積み、抽象概念への理解を深めていく。本研究の目的は、絵本がどのように抽象概念を子どもたちに伝えているのか分析することである。本論文では、二歳と五歳対象のハンガリーの絵本とその邦訳本を認知言語学の視点から分析する。

1.1 本研究における疑問点

- ・絵本には、どのような概念メタファー・メトニミーから生み出されたメタファー・メトニミー表現があるのか。
- ・対象年齢の違いは、絵本に使われるメタファー・メトニミー表現に現れるか。
- ・ハンガリー語から日本語への翻訳過程でメタファー・メトニミー表現は変化するのか。言語文化の違いはどのような影響を与えるのか。

1.2 仮説

- ・五歳対象の絵本には二歳対象のものよりも多くのメタファー・メトニミー表現が使われている。
- ・作者と日本語訳者は共に同じ抽象概念を子どもに提供するのに反して、

ハンガリー語原本と邦訳本にはメタファー・メトニミー表現に何らかの違いがみられる。

・異なる言語文化というコンテクストが絵本のメタファーに大きな影響を与えている。

2. 理論的背景

概念メタファー理論 (Conceptual Metaphor Theory: CMT) は、1980年に George Lakoff と Mark Johnson の著書 *Metaphors We Live By* (邦題『レトリックと人生』) が出版されて以来、著しい発展を遂げてきた。本研究はこの概念メタファー理論を基盤とし、絵本の中にみられるメタファー・メトニミー表現の背景にある概念メタファー・メトニミーの分析をする。

Kövecses (2010) は概念メタファーを次のように定義する。認知言語学において、概念メタファーはある概念領域を別の概念領域をもって理解させるものである (Kövecses 2010:4)。そして概念メタファーは、<概念領域 A は概念領域 B である (CONCEPTUAL DOMAIN A IS CONCEPTUAL DOMAIN B)> という形式で表記される。本論文中でも、概念メタファー及び概念は山括弧内に入れ、対応する英文のアルファベットは小型英大文字 (スモールキャピタル) で表記する。より抽象的な概念領域 A はターゲット領域、より具体的な概念領域 B はソース領域と呼ばれる。例として、概念メタファー<愛は旅である (LOVE IS A JOURNEY)> を挙げる。私たちは<愛>という抽象概念を、より具体的な概念<旅>との体系的な対応関係を用いて理解しようとする。つまり、ソース領域<旅>がターゲット領域<愛>へとその概念的対応が写像されるのである。これがマッピングである。たとえば、*We aren't going anywhere* (私たちはどこへも行かない) と言うとき、*go somewhere* (どこかへ行く) は目的地へ旅していることを示し、*we* (私たち) は旅人を意味する。ここで、旅の目的地を恋愛関係のゴールへ写像し、心の中で旅人を恋人へ写像する。すると、この文を適当なコンテクスト内で聞いたとき、聞き手は話し手が<旅>について話しているのではなく、<愛>について言ってい

るのだと解釈することができる。Kövecses (2010) から引用した表 1 は、概念メタファー〈愛は旅である (LOVE IS A JOURNEY) 〉を特徴づける体系的な対応関係、つまりマッピングを示す (Kövecses 2010:8-9)。

表 1 <愛>と<旅>のマッピング

ソース領域<旅>		ターゲット領域<愛>
旅人	→	恋人
乗り物	→	恋愛関係そのもの
旅	→	恋愛関係にあるうちの出来事
旅をした距離	→	作られた過程
出会った障害物	→	経験した困難
行き先の決定	→	行動の選択
旅の目的地	→	恋愛関係のゴール

(Kövecses 2010:8-9)

概念メタファーは、類似性のある対応関係を持つ二つの領域で成り立っている。これに対して、概念メトニミーはいくつかの要素を含むただ一つの領域で成り、そしてそれは隣接関係で構成される。概念メトニミーは次のように定義される。概念メトニミーは同じ領域内に属するある実体が目標である別の実体を指し示す認知プロセスの一つである (Kövecses 2010:173)。概念メトニミー〈部分と全体 (PART FOR WHOLE) 〉が例として挙げられる。この概念メトニミーは *We need some good heads on the project* (私たちはプロジェクトに優秀な頭 (人物) が必要だ) などのメトニミー表現の上位レベルに存在する。人間の〈部分〉である *heads* (頭) が〈全体〉の *people* (人) を指し示している。

私たちがこれらのメタファー・メトニミー表現を正しく理解するためには、適切なコンテクストを必要とする。コンテクストとは、会話の参加者自身に関連付けられる社会的シチュエーションと定義される (van

Dijk 2009:5)。Kövecses (2015) は van Dijk (2009) によるコンテキストの定義を次のようにメタファー理論に取り入れた。コンテキストという概念は言語や文脈や文化や社会、そして話し手と聞き手とトピックといった談話に関連するあらゆる実体物を含む (Kövecses 2015:119)。Widdowson (2007) もまた、コンテキストは発話の際の単なるシチュエーションではなく、その発話を構成するすべての要素を含むと主張する。言い換えれば、コンテキストは発話における外的環境だけではなく、発話に参加する者たちの考えが反映される内的要素も意味する (Widdowson 2007:20)。よって、絵本に関するコンテキストは、子どもが興味あるテーマ、内容や登場人物に関する知識、作者と作者自身の経験、読者である子ども、子どもが暮らす文化や社会、絵本を子どもに与えたり読み聞かせる親や幼稚園教諭や保育士など、様々な要素が含まれる。

3. 方法

本研究で筆者は次の二冊を選択した。Marék Veronika 作の *Jó éjszakát, Annipanni!* と Bálint Ágnes 作の *Mazsola* である。ウェブサイト *BabyBooks.hu* によると、前者は二歳対象で、後者は五歳対象の絵本とされている。この二つの年齢は、言語習得期の異なる段階にあるといわれる。一歳半と三歳の間は言語知識が急激に発達する時期で、三歳から六歳は発話のバリエーションが豊かになってくる時期である。五歳頃には、童謡や詩やお話のような文学作品にみられる詩的機能をもった発話をし始める (Tancz 2011)。よって、五歳の子どもには、比喻表現を生産する能力が備わっていると考えられる。しかし、このくらいの年齢の子どもでもメタファー表現の理解ができていない例が報告されている。母親の「ほら見て、彼女は天使ね！」という発言に、ある女の子は「違うよ、彼女は天使じゃないよ、だって羽がないもの。」と答えたという。この会話では、母親はかわいいというメタファー的意味を込めて「彼女は天使だ」と表現したのであるが、女の子は「天使」を文字通りに解釈したのだ。私たちは自分の感情や感覚を他人に説明したり、人生や愛や

友情といった抽象概念を伝えるとき、メタファーなしでは表現できない (Kövecses, パーソナルコミュニケーション)。よって、私たちの日常言語はメタファーに溢れている。それゆえ、もしメタファー表現が正しく理解できない可能性があるとしても、幼い子ども向けの絵本にもメタファーに基づく表現がみられても不思議ではない。そこで本論では特に、絵本の中で友情、人生、愛、あるいは感情といった抽象概念が、どのように表現されているのかをみていく。

筆者は上記二冊の絵本からそれぞれ 46 文を分析した。これは、二冊の対象年齢の違いゆえ文量も大幅に異なるためである。全 46 文の *Jó éjszakát, Annipanni!* に揃え、*Mazsola* からは最初の 46 文のみを分析対象とした。また、ハンガリー語原本とそれぞれの邦訳本を比較した。二つの大きく異なる文化が同じお話にどのように影響を与えているのか考察するためである。ハンガリー語原本にみられるメタファー・メトニミー表現が邦訳本でもメタファー的・メトニミー的役割を果たしているかどうか焦点を当てる。また、メタファー・メトニミー表現を分析する際、その背後にある概念メタファー・メトニミーを明らかにする。本論文では Kövecses が提唱する概念メタファー・メトニミーの定義を取り入れる。

4. 分析・考察

本論文では二冊の 46 文におけるメタファー・メトニミー表現を次の二つの観点から考察する。一つ目は二歳対象と五歳対象の絵本の違い、二つ目はハンガリー語と日本語の違いである。二歳の子ども対象の絵本 *Jó éjszakát, Annipanni!* にはメタファー表現が 3、メトニミー表現が 4 あった。このメトニミー表現のうち 2 つはオノマトペである。一方、五歳の子ども対象の絵本 *Mazsola* の 46 文にはメタファー表現が 5、メトニミー表現が 17 あった。このメトニミー表現のうち 3 つはオノマトペである。そして、邦訳本『おやすみ、アンニパンニ!』にはメトニミー表現のみ 2 (いずれもオノマトペ) あり、『こぶたのレーズン』にはメタファー表現が 7、メトニミー表現が 14 (うちオノマトペ 8) あった。

4.1 対象年齢が異なる絵本間の違い

4.1.1 Jó éjszakát, Annipanni!の分析

まず初めに、二歳対象の絵本 *Jó éjszakát, Annipanni!*における概念メタファー・メトニミーを分析する。絵本の中のメタファー表現の一つに、“*Boribon már mélyen alszik.* (文字通りの意味は「ブルンミはもう深く眠っています」)” (Marék 2014:19) がある。この *mélyen* (深く) という深さを示す語がよい眠りを意味する。よって、概念メタファー<眠りの質は深さである (THE QUALITY OF SLEEPING IS DEPTH)>がこのメタファー表現の背景にあると考えられる。別のメタファー表現“*Töri a fejét Annipanni.* (文字通りの意味は「アンニパンニは頭を割って (砕いて) います」で「考えています」の意味を表す。)” (Marék 2014:27) には、二つのメタファーが背景にある。一つは行為自体の類似性である。私たちは考え事をするとき脳を働かせる。ハンガリー母語話者は、この脳を働かせるために頭を砕くという表現からクルミを食べるときに殻を割る行為を連想するようだ。よく人は考えすぎると頭が痛くなることがあるが、考えるという行為の度合いが割る行為の強さと相まって、頭痛を引き起こすと考えることもできよう。また、この精神的行為の中心は脳であるので、表現中の *fej* (頭) は脳が容器として用いられていることがわかる。よって、<頭は容器である (HEAD IS A CONTAINER)>という概念メタファーが背景にあるとみられる。次の二つの表現“(…) *megpillantanak egy nyivákoló kiscicát.* (悲痛な声で泣いている子猫を見ました)” (Marék 2014:3) と“*Valaki nyafog.* (誰かがぐずっています)” (Marék 2014:17) はオノマトペである。前者 *nyivákoló* は泣いている様、後者 *nyafog* は小さな子どもが不満を言う様を表し、どちらも泣き声に由来している。オノマトペはメトニミー表現に分類される (Kövecses 2010)。

分析の結果、絵本の中で最も頻繁に出現した概念メタファーは<人間は動物である (HUMAN IS ANIMAL)>、つまり擬人化だった。Kövecses (2010) によれば、擬人化は文学作品でよく使われるメタファー的手法の

一つである (Kövecses 2010:55)。絵本では、擬人化は子供に抽象概念の理解を促す共通の手段でもあるようだ。特に、*Jó éjszakát, Annipanni!* には概念メタファー〈人間の振る舞いは動物の振る舞いである (HUMAN BEHAVIOUR IS ANIMAL BEHAVIOUR)〉が見られた。たとえば、「くま」の *Boribon* (ブルンミ) が女の子 *Annipanni* (アンニパンニ) と同じようにことばを話したり、二人が一緒に暮らす家で夕食を共にしたりする。また、お話の中に出てくる同じ動物間でもその振る舞いに違いがあるところが興味深い。女の子と一緒に暮らし常に人間のように振る舞う「くま」に対して、「ねこ」は迷子になっているところを拾われてくるのであるが、現実の子猫のように行動する。「ねこ」は話すことはできるが、食事のときにテーブルではなく床でスプーンを使わずミルクを飲んだり、寝るときはベッドではなく床のスリッパの上なのだ。それに対して、「くま」はお話の中で家族のような役割を担っている。「くま」が女の子の小さな弟のような振る舞いをするのである。さらに、動物の中でも「くま」だけに女の子の小さな弟の役割が与えられているとすることができる。子どもたちがよく夢見るように、お気に入りのぬいぐるみと友だちや小さな家族のように話をしたいという願いが、絵本の中で実現されている。「くま」と女の子の関係は、読者である子どもたちに家族のなかでの振る舞い方を示している。抽象概念の一つである〈人間関係〉を絵本の中で学び、子どもたちが社会の中で人との関係を築いていく手助けをしていると考えられる。

動物の振る舞いを通して人間の振る舞いを理解するのとは逆に、作者が人間の行為をもって動物の行為を説明している場面もある。たとえば、次の表現“*A cica is jól megmosakszik, de víz nélkül.* (文字通りの意味は「猫もよく洗っています、でも水なしで」)” (Marék 2014:9) の背景には概念メタファー〈動物の振る舞いは人間の振る舞いである (ANIMAL BEHAVIOUR IS HUMAN BEHAVIOUR)〉が存在する。この「ねこ」の行為を作者が文字通りに「猫が体を舐める」と表現したら、猫にあまり馴染みのない子どもは、猫が体を舐める行為と体をきれいにする行為を繋げて理解することが難しいであろう。



図 1 “A cica is jól megmosakszik, de víz nélkül. (猫もよく洗います、でも水なしで)”の絵
(Marék 2014:10)

図 1 は現実の猫の体の洗い方、「猫が体を舐める」を読者に示している。絵の中では「洗う行為」が「舐める行為」に置き換えられているのである。絵では、女の子と動物たちはお風呂に入っていて、自分の体を洗っている様子を描いている。この女の子と「くま」が自分の体を洗っているというコンテキストが、「ねこ」は体を舐めているのはなぜかを説明している。子どもたちは、文と絵を一緒に見ることで、つまりメタファー表現をコンテキストと合わせて読むことで、文の本当の意味を理解すると考えられる。

4.1.2 Mazsola の分析

五歳対象の絵本 *Mazsola* におけるメタファー表現の一つに“*Nem is teketóriázott vele sokat.* (文字通りの意味は「それについて多くを気にもしませんでした」)” (Bálint 2015:3) がある。文中の *sokat* (多くを) は考えるのに費やす多くの時間を指す。つまり、数えることのできない時間が数えることのできる物理的物質に写像されている。これは概念メタファー<時間は物体である (TIME IS A PHYSICAL OBJECT)>に基づいた表現である。メトニミー表現の例は、“*Manófalvi Manó fődél nélkül*

maradt. (文字通りの意味は「ノーム村のマノーは屋根なしで残りました」) ” (Bálint 2015:1) である。この文における *födél* (屋根) は家を意味する。家の一部である屋根を家全体の代わりに用いて、家全体が表象されている。これは概念メトニミー<部分と全体 (PART FOR WHOLE)>に基づいている。メトニミー表現 17 のうち 3 つが次のようなオノマトペであった。“A malacka bánatosan nyöszörgött (...). (子豚が悲しげに苦痛の声を上げました)” (Bálint 2015:3) の *nyöszörög* という語が「音を伴う不満」(ハンガリー語オノマトペの詳しいカテゴリーについては Varga 2011:94 を参照) を意味する。人が不満を漏らす際の音が、不満を言うという行為を表す。ここには、概念メトニミー<結果と原因 (EFFECT FOR CAUSE)>の特別なケースである<音とそれを引き起こす理由 (SOUND FOR THE REASON THAT CAUSED IT)>がみられる。

この絵本の 46 文中最も頻出した概念メタファーは、*Jó éjszakát, Annipanni!* と同じように<人間は動物である (HUMAN IS ANIMAL)>だった。この概念メタファーの<人間の振る舞いは動物の振る舞いである (HUMAN BEHAVIOUR IS ANIMAL BEHAVIOUR)>は、「こぶた」の *Mazsola* (レーズン) が人間のように話をしたり、音を立てずに口を閉じて食べ物をかもうとしたりするところにみられた。さらに、「こぶた」は小人の *Manócska* (マノー) の子どものように振る舞う。しかし、「こぶた」の振る舞いは人間のような「くま」ブルンミや動物のような「ねこ」とは違い、子どものように振る舞いながらも、穴掘りや体が汚れることを好むし、「こぶた」の出す音は動物の豚のものとそっくりなのである。動物の豚と人間の子どもの混ざったようなキャラクターだと言える。「こぶた」と小人との関係はやはり<人間関係>のなかでも<家族関係>を表す。「こぶた」が間違っただけをしたときやわざと体を汚すときは、小人がどのように振る舞うべきかをこぶたに教える。

絵本の中の「こぶた」の行動に関しては、それが動物の豚のステレオタイプに基づいていることがわかる。一般に、豚が汚かったり臭かったりするという知識が、豚のように振る舞うことは良くないと思わせる。しかし、この評価は人間の視点からのものである。絵本によくみられる

動物の擬人化における特徴的な役割は、動物のステレオタイプに基づいている。ステレオタイプによって、読者は容易に動物の主な特性を認知できるので、話の中でキャラクターを深く説明する必要がない。表 2 は絵本に出てくる動物の典型的なステレオタイプの例を示す。

表 2 絵本における〈動物〉と〈人間〉のマッピング

ソース領域〈動物〉		ターゲット領域〈人間〉
老犬	→	落ち着いていて忠実な老人
雌鶏	→	噂好きの女の人
猫	→	地に足のつかない人
子犬	→	注意力散漫な子ども

(Bálint 2012)

動物のステレオタイプの歴史は長く、ギリシャ神話 (Aesop, around 620 BC–564 BC) ローマ神話 (Phaedrus, around 15 BC–AD 45) にもみられる。古代のお話の中でも、動物は人間のステレオタイプを象徴している。たとえば、狐はずる賢い人間、狼は悪い人間、羊は純粋なあるいは弱い人間といった具合である。先に、ステレオタイプによって絵本に登場する動物の役割の理解が容易になると述べたが、これには馴染みの深い動物であること、その動物に関する知識があることが条件である。なぜなら、日本の童話に頻繁に出てくる狸はハンガリーではあまり馴染みがないため、その特性を想像することすら難しいからだ。

分析の結果、五歳対象の絵本の方が二歳対象のものよりも多くのメタファー・メトニミー表現を含むということがわかった。五歳対象の本には 22 のメタファー・メトニミー表現があり、二歳対象のものには 7 しかみられなかった。メタファーとメトニミーの間ではメトニミー表現の方が多く見つかった。特に差が顕著なのは五歳対象の方で、メタファー表現 5 に対し、メトニミー表現は 17 も出現している。これは子どもが

メタファー表現よりもメトニミー表現の方が理解しやすいからだという可能性がある。

4.2 ハンガリー語原本と邦訳本のあいだに見られる違い

4.2.1 『おやすみ、アンニパンニ！』の分析

まず、ハンガリー語原本からはメタファー・メトニミー表現が7見つかったのに対し、*Jó éjszakát, Annipanni!* の邦訳本である『おやすみ、アンニパンニ！』にはメタファー表現はみられなかった。ハンガリー語原文のメタファー表現“*Boribon már mélyen alszik.* (ブルンミはもう深く眠っています)” (Marék 2014:19) は日本語では「ブルンミはぐうぐうねています」(マレーク 2003:11) とオノマトペを用いて訳され、別のメタファー表現“*Töri a fejét Annipanni.* (文字通りの意味は「アンニパンニは頭を割って(砕いて)います」で「考えています」の意味を表す。)”

(Marék 2014:27) は次に続く“*de nem jut eszébe semmi.* (でも何も思いつきません)” (Marék 2014:27) と合わせて「アンニパンニはこまりました」(マレーク 2003:15) と訳されている。邦訳本に見られたメトニミー表現は2文で、いずれもオノマトペ表現であった。その2つのオノマトペは次のハンガリー語表現を訳したものである。一つ目の *mélyen alszik* (深く眠る) は「ぐうぐうねています」(マレーク 2003:11) と訳され、二つ目の *körül néz* (見回す) は「きょろきょろしています」(マレーク 2003:8) と訳されていた。前者は寝ているときの音を表し、後者は探すときの目あるいは頭の動きを表す。よって、これらオノマトペの背景にみられる概念メトニミーは、<結果と原因 (EFFECT FOR CAUSE)>における二つの異なるタイプであると言える。前者は<引き起こされる音とそれを引き起こす出来事 (SOUND CAUSED FOR THE EVENT THAT CAUSED IT)>、後者は<引き起こされる動きとそれを引き起こす出来事 (MOVEMENT CAUSED FOR THE EVENT THAT CAUSED IT)>である。日本語のオノマトペは<音>だけでなく、音の発生しない<状態><動き><情態>も意味し得る。吉村・関口 (2007) は、オノマトペを三つのグループにカテゴリー化した筧 (1993) の定義をもとに、日本語のオノマ

トペの特徴を次のように述べている。三つのグループは<音>を表す擬声語、<状態>や<動き・行動>を表す擬態語、<感覚>や<感情>を表す擬情語である (cf. 筧 1993:39)。吉村・関口 (2007) によれば、主に擬態語は、物体や人物の状態、またそれらの動きを表現するとした。オノマトペは客観的、身体的事実を表すだけでなく、主観的な視点も表している。たとえば、「ピカピカの車体」は、車体が光っている見た目をピカピカと表現するが、同時に表現者の主観にも焦点が当てられていると考えることができる。つまり、車体がきれいに磨かれているというポジティブな評価も意味に含まれていると考えられる (吉村・関口 2007:67)。『おやすみ、アンニパンニ!』の中の「きよろきよろ」という表現には、「くま」があちらこちら「ねこ」を探している状況から、心配している心情も読み取ることができる。

4.2.2 『こぶたのレーズン』の分析

Mazsola の邦訳本『こぶたのレーズン』には、メタファー表現が 7、メトニミー表現が 14 見つかった。この数字はハンガリー語原本 (メタファー表現 5、メトニミー表現 17) と似通っているが、オノマトペの数を比較すると相違がある。ハンガリー語のテキストにはメトニミー表現 17のうちオノマトペは 3であったが、日本語テキストにはメトニミー表現 14のうちオノマトペが 8見つかった。ハンガリー語原本よりも日本語訳の方が多くのオノマトペを使っていることがわかる。豚の鳴き声は両言語共に頻出するのであるが、特に「こぶた」が食べているときの音が多い。たとえば、ハンガリー語の *csámcsogás* (食べている音) は日本語で「はぐはぐ、くちやくちや」と訳された。日本語訳にのみ出現したオノマトペ表現は、*ócska* (文字通りの意味は「古くてあまり価値のない」) の訳「ぼろぼろの」(バーリント 2012:5)、*a szél elfújta a kalapot* (風が帽子を吹きました) の訳「風がぶわっと、ぼうしをふきとばしてしまい」(バーリント 2012:6)、そして *egyszerűen odébb söpörte* (単にあちらの方へ掃きました) の訳「ただ、さっと、こぶたをほうきで、はいたのです」(バーリント 2012:11) だった。「ぼろぼ

ろ」は古い物の状態なので<引き起こされる状態とそれを引き起こす出来事 (STATE CAUSED FOR THE EVENT THAT CAUSED IT) >、「ぶわっと」はいきなりの強い風の動きを表すので<引き起こされる動きとそれを引き起こす出来事 (MOVEMENT CAUSED FOR THE EVENT THAT CAUSED IT) >、「さっと」は素早い動きや掃くときの音を表すので<引き起こされる行為あるいは引き起こされる音とそれを引き起こす出来事 (ACTION CAUSED FOR THE EVENT THAT CAUSED IT OR SOUND CAUSED FOR THE EVENT THAT CAUSED IT) >といった概念メトニミーがみられる。いずれも概念メトニミー<結果と原因 (EFFECT FOR CAUSE) >の特別なタイプである。

以上から、邦訳本の方がハンガリー語原本よりもオノマトペが多くみられるということがわかる。岡本 (1990) は日本語とフランス語の絵本を比較し、日本の絵本におけるオノマトペ使用の頻度の高さについて次のように述べている。日本語のオノマトペは子どもだけではなく、大人にとっても正式な語彙として扱われているのに対し、フランス語のオノマトペは赤ちゃんに対してのみ使われる (岡本 1990:96)。それゆえ、オノマトペは言語間において異なる特性、価値を持つということがわかる。さらに、日本語では、オノマトペが子どもへの説明を容易にすると考えられているので、日本の親や保育者は従来表現よりもオノマトペを多用する傾向にあるようだ (辻 2013:5)。また、van Dijk (2009) や Widdowson (2007) によると、コンテキストは談話の参加者に関連づけられた情報であることから、子どもを絵本のコンテキストとして捉えることができる。ハンガリー語の絵本はハンガリーの子どもに、日本語の絵本は日本の子どもに、読み聞かせたりお話をしたりするものだと想定すれば、日本語訳者がハンガリー語作者よりもオノマトペを多く使ったことも当然である。それは、読者である日本の子どもに、お話をよりわかりやすく伝えようとした結果なのだとわかる。

概して、同じお話であるにもかかわらず、ハンガリー語と日本語間には違いがみられる。これは、文化的コンテキストが異なるためである。つまり、語や表現の概念は文化的コンテキストのなかで形作られるためだと言える。

5. 結論

本論文では、対象年齢の異なるハンガリーの絵本とその日本語訳を比較分析した。結論として、本研究の三つの疑問点に、以下のような答えが得られた。まず、普遍的な概念メタファー・メトニミーによって生み出されたメタファー・メトニミー表現が、絵本においても使われていることがわかった。中でも頻出する概念メタファーは<人間は動物である (HUMAN IS ANIMAL)>だった。この概念メタファーは、文化・社会に適した<人間の振る舞い>や、複雑で曖昧なく人間関係>を子どもたちに教えるのを助ける。日々人間の世界を観察している子どもたちにとって、<人間>という言葉ではなかなか説明しづらい概念を、親しみやすいキャラクターをもって説明してくれる絵本の存在意義はとても大きい。次に、対象年齢によって絵本に使われるメタファー・メトニミー表現の頻度に違いがみられた。五歳対象の絵本には二歳対象のものよりも多くのメタファー・メトニミー表現が使われていた。これは絵本の読者として小さな子どもが想定された場合、より具体的な文字通りの表現が使われることが多いからだと考えられる。最後に、ハンガリー語原本と邦訳本では使われるメトニミー表現に文化的違いがみられた。日本語訳者はハンガリー語作者よりも多くのオノマトペ表現を使っていた。これも、絵本の読者として想定される子どものおかれている言語文化が異なるためである。日本語においてオノマトペ表現は、子どもにとってより分かりやすいとされるからだ。これにより、子どもが絵本の重要なコンテキストであることも確認できた。

参考文献

- 岡本克人 (1990) 「日仏語絵本の世界：対照言語学的研究」『高知大学学術研究報告』39：93-104。
- 筧寿雄 (1993) 「一般語彙となったオノマトペ」『月刊言語』22(6)：38-45。
- 辻幸夫 (2013 [2002]) 『認知言語学キーワード事典』研究社。
- 吉村浩一・関口洋美 (2007) 「オノマトペで捉える逆さめがねの世界」『法政大

学文学部紀要』 54 : 67-76 (<http://hdl.handle.net/10114/3122>) 。

Kövecses, Zoltán (2010 [2002]) *Metaphor: A practical introduction*. New York: Oxford University Press.

Kövecses, Zoltán (2015) *Where metaphors come from: Reconsidering context in metaphor*. New York: Oxford University Press.

Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.

Tancz, Tünde (2011) A kommunikáció és a nyelv fejlődése a kora gyerekkorban (http://janus.ttk.pte.hu/tamop/tananyagok/kommunikacio_es_fejlodes/index.html).

Van Dijk, Teun (2009) *Society and discourse: How social contexts influence text and talk*. Cambridge: Cambridge University Press.

Varga, Mónika (2011) Hangutánzó igék morfológiai vizsgálata. *Magyar Nyelvjárások*. 49: 87-104.

Widdowson, Henry G. (2007) *Discourse analysis*. Oxford: Oxford University Press.

絵本

バーリント, アーグネシュ (うちかわかずみ訳) (2012) 『こぶたのレーズン』
偕成社。

マレーク, ベロニカ (羽仁協子訳) (2003 [2001]) 『おやすみ、アンニパンニ!』
風濤社。

Bálint, Ágnes (2015 [2006]) *Mazsola*. Budapest: Holnap Kiadó.

Bálint, Ágnes (2012) *Labdarózsa*. Budapest: Holnap Kiadó.

Marék, Veronika (2014 [1972]) *Jó éjszakát, Annipanni!*. Budapest: Pozsonyi Pagony.